



## 地域の文化と 活力の発信

電子書籍で名著復刊

「山猫博士」の愛称で親しまれる函館在住の版画家・佐藤国男さんの著作に、「山猫博士のひとりごと」というエッセイ集があります。佐藤国男さんは、「銀河鉄道の夜」「セロ弾絵本」の挿絵画家として全国に知られた存在ですが、著述家としても味わいのある文章を書かれます。

『山猫博士のひとりごと』は、北海道新聞夕刊の「みなみ風」に、実に15年にわたり連載した同名のコラムを単行本にしたもので、東京の出版社から続編も含め2作が刊行されました。残念ながらその出版社が倒産しました。残念ながらその出版社が倒産しました。この「山猫博士のひとりごと」を、電子書籍として復刊しました。エッセイの内容は、大きく分

けすると、宮沢賢治のこと、佐藤さんが小学生のころから興味をもち続けていたという縄文の話、故郷せたなで野山を駆けまわった少年時代の話、常生活のことが中心ですので、2作に収録された約100編のエッセイをこれらをテーマで再編し、4分冊で発行しました。

### 売れないけれど、やってよかつた

電子書籍はまだまだ「売れる」ものではありません。なのに電子書籍化を行うのに半年も費やしてしまいました。時間がかかった理由としては、せっかく電子書籍にするのだから、どうしたことか、エッセイを地元の朗読ボランティアの方に読み上げていただき、それにBGMも付けて、音声付きの書籍にしたからです。

「山猫博士のひとりごと」は、北海道新聞夕刊の「みなみ風」に、実に15年にわたり連載した同名のコラムを単行本にしたもので、東京の出版社から続編も含め2作が刊行されました。残念ながらその出版社が倒産しました。この「山猫博士のひとりごと」を、電子書籍として復刊しました。エッセイの内容は、大きく分

を通じて少々売れたくらいでは、採算ベースには乗りません。それでも復刊に踏み切った背景には、いくつありました。

一つは、佐藤さんの少年時代の話です。エッセイの中には「年の離れた近所の子どもたちと一緒に遊びながらスコットの使い方ばかりか、子どもでいたような気がする。実際、スコットの使い方は、後に土木作業員をした時、大いに役立つたものだ」という一節があるのですが、こういう話を、学年の違いを越えて一緒に遊ぶ機会の少なくなった今の子どもたちや保護者に知ってほしいという思いがありました。

また一つは、佐藤さんの幅広い交友関係です。エッセイに登場するのは、シエフ、音楽家、フランメン「ダンサー」、残念ながら閉校となりましたが、詰め込み教育に異議を唱えるフリースクールの校長など、実際に多岐にわたります。

新幹線延伸で観光客へのアピールという意味もあってか、函館・道南といふとグルメばかりが話題に上りますが、「道南には人材も豊富ですよ」ということを伝えたい、というのがありました。

函館・道南の豊富な人材

電子書籍で地方創生

もう一つ、これは結果論ですが、「山猫博士のエッセイが朗読付きで復刊」という話を聞いて、函館や八雲で朗読ボランティアとして活躍する方々が「私も、私も」と名乗りを上げ、20名の方が朗読に参加してくださいました。佐藤さんという地域の才能を盛り立てよう、とするホットな人がつながりや活力は、全国に誇っているものだと思うのです。

今や出版界は慢性不況に陥っています。それでも印刷や配達が不要の電子書籍なら、紙の書籍では採算の取れないものにも挑戦できます。出版は東京一極集中が顕著な産業ですが、インターネットでどこからでも全國に届けることができる電子書籍は、地方の文化や活力の発信にも利用できのではないか、と淡い期待をしています。

**★プロフィール★**

おおにし つよし  
**大西 剛さん**

大阪出身。  
2011年秋より、函館に移住。  
「新函館ライブラリ」を設立し、函館発の電子書籍・印刷書籍の出版に取り組む。  
2012年には、2008年秋から  
の函館通いで感じた町の魅力を綴った「新函館写真紀行」を出版。  
現在は、移住サポーターとしても活躍している。